【 7 】

氏　　名	稲葉　稔（いなば　みのる）
学位の種類	文学博士
学位記番号	論文博第147号
学位授与の日付	昭和55年11月25日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
学位論文題目	疎外の問題
論文調査委員	（主査）教授 上田閑照　教授 辻村公一　教授 酒井　修

論文内容の要旨

本論文（A5版316頁　昭和52年2月，東京，創文社刊行）は「疎外の問題」に関係のある五つの論文を含んでいる。第二論文から第五論文までは，主題的に「疎外」を問題として追究したものであり，第一論文は，論者がその際基本的に依拠したヘーゲル「精神現象学」研究の基礎を確立した論文である。

第一論文は，「精神現象学における自意識の研究序説」と題されている。この論文の特色は，ヘーゲルに即してヘーゲルを理解しようとする論者の思惟の努力のうちに独自の問題意識が生れて来るところにある。自己意識とその固有の対象である他の自己意識との関わりの根本的なあり方である「承認」は，さし当って相互不平等な承認として「支配と隷属」「主と奴」との関係において現象するのであるが，それは相互不平等であるが故に否定され没落せざるを得ない。論者はこの「主と奴」の弁証法のロゴスをヘーゲルに即して克明に展開している。そして，ヘーゲルに於ける「主—物—奴」の中に現代の不可欠的媒語として「機械」が挿入された場合，それによって主的意識も奴的意識も共に支配されるに至るという事態に独自の考察を進めている。

第二論文は，「精神現象学における疎外の問題」と題されている。近代世界における疎外の問題をはっきり疎外の問題として自覚的に思惟したのはヘーゲルであった。「疎外」の概念が一般化するとともに「疎外」の概念そのものから疎外されている如き現代の事態を反省しつつ，論者はヘーゲルに遡って，疎外の問題性が生々しく展開される精神現象学「自己疎外的精神」の章を立入って究明してゆく。「真なる精神，人倫態」からの疎外によって近代的世界が形成的に開かれて来るとともに，近代的世界そのものがそれ自身の内に於て自己疎外的になる。即ち，「現実の世界」と「信仰の国」とに分裂し，しかもこの両者が，分裂的に通じ合い，通じ合いながら分裂するという仕方で相互に疎外し合う。更に，「現実の世界」も「信仰の国」もそれぞれ自身の内で自己疎外的である。このように一切が疎外の内にある運動を綿密に追究することによって論者は，Entäusserung（外化—疎外）と Zurücknehmen, Zurückerhalten（取りもどす）という機軸，即ち，自己を放棄し断念し譲り渡すという仕方で外化し，その代りに，或る変換された代償的なあり方で取りもどすという機軸を見出してゆく。

第三論文は「言葉と疎外（その一）―マルチン・ブーバーの言語論をめぐって」と題されている。自己疎外的精神に於ける「言葉」へのヘーゲルの着目に示唆を受け，同時に，「言葉」自体に外化の働きがあることに着目しつつ，論者は「言葉と疎外」という問題への洞察を展開してゆく。先ず言葉自体のあり方の究明のために，ブーバーの「語られる言葉」という論文が援用される。ブーバーは「言葉」を三つの在り方に区別し，それを言葉の在高，財および発行による生起流通として規定した。言葉が語り出される事によって人間の「間」が現勢的に開かれて言葉が流通するという言葉の「発行的流通」の場は，貨幣的経済の流通の場と構造的にアナロゴスである。この事態の内に論者は「言葉と疎外」という問題の由来を見定めている。

第四論文は「言葉と疎外（その二）―ヘーゲルと現代の問題」と題されている。「言葉が自我そのものを外に語り出す」。「言葉」は，内的な自分だけであるという「純粋な自我」が外に現われ出され，その外に現われ出されたところで通用・流通する在り方である。殊に近代的世界に於ける自己意識が「言葉」という「定在」に変換されているというヘーゲルの洞察した事態を綿密に追究しつつ，論者は，あらためて前述の機軸，即ち個別的自己を「放棄・断念・移譲する」ことによって，普遍的通用・流通の場にまで「外化し」，その場に於て普遍的一般的に変換された自己を，代償的に「取りもどし・回収する」という機軸を確認してゆく。そして，この機軸に照らして，外化と取りもどしの間にずれが生じるという疎外的事態，更に，現代にいたって殆んど取りもどしが不可能である程に外化が強大になって来た亀裂的疎外，ヘーゲルでは未だ見られなかったこのような事態へと独自の追究を進めて行く。

第五論文は，「カント哲学の構造と疎外の問題」と題されている。近代世界の底を流れていると見られる以上のような外化・疎外の動向が，哲学そのものの骨格的な構造の面に鋭くかつ深く出ているのがほかならぬカント哲学であるという視点に立って，論者は，カント哲学の構造を見直してゆく。即ち，「物自体」についての従来の形而上学的「認識」は不可能として放棄断念され，その代りに，「純粋直観」および「純粋悟性概念」がそれの「現象」――われわれの側からすれば，経験――のうちへと「構成的使用」的に積極的に投げ入れられ，その投げ入れにおいて取りもどされる。理性はその「理論的使用」における，「純粋悟性概念」およびそれに基づく「原則」の「経験の限界」を超えた投げ入れを放棄せしめられ，その「実践的使用」を「実践理性」としてあらたに取りもどすのである。

このようにして論者は，そもそも「放棄と取りもどし」という構造が近代的世界を開いて来たということを示している。

論文審査の結果の要旨

本論文は「疎外の問題」を問題として追及究明しようとした，探究精神に貫かれた労作である。「疎外」は近代から現代にかけて人間の存在そのものを根本的に問題化するような事態であるが，論者は，既成の「疎外」概念による常套的方法を離れ，その事態の根底を探るために，「疎外」概念がはじめて自覚的に形成されてくるヘーゲルに直接戻って探究の手引を求めている。「精神現象学」の「自己疎外的精神」の章の綿密な研究によって Entäusserung（外化―疎外）という概念を学び取り，これを基礎にして探究を進める。Entäusserung とは「あるものを己れの手許から己れの外に出し，外に現われたかたちにして外

にゆだねること」であるが，それは，放棄，断念，移譲という意味をもった「外化すること」である。そして論者は，「精神現象学」のこの章に於て，Zurücknehmen, Zurückerhalten（取りもどす）という語が「外化」という語の対をなすものになっていることを見出し，「外化—取りもどし」という機軸を事態の基本構造とする。そこへと外化されたその場で，放棄断念されたものが或る代償的な在り方に迄変換されて，その場から再び取りもどされるのである。そのような場を論者は「普遍的な伝通・流通の場」と名づけ，外化自体がその場を開くのに寄与すると考える。外化とは，単に「外へ」のみならず，「外を」開いてゆく力でもある。このような基本構造の確定は複雑な事態を立入って而も明確に分析することを可能にする。

論者は「外化——取りもどし」というこの機軸に従って，(1)外化されたものが代償的な形で取りもどされる，(2)外化と取りもどしの間に或るずれが生ずる，(3)取りもどしが不可能な程に外化されるという三つの相を区別し，そして更に，取りもどし不可能ということも気付かれない程に外化が進むことに注意する。(1)も既に潜在的には疎外の方向を含むが，(2)以下に於て外化は疎外となる。以上の諸相に関する論者の分析は明確綿密であり，疎外という事態の解明に大きな意義をもつものと考えられる。

「外化——取りもどし」という機軸は論者に「言葉と疎外」という問題に気付かしめる。ヘーゲルから，純粋な自我が自我として定在になり得るのは「言葉」以外にはないという示唆を受けとり，又，M・ブーバーの言語論から学びつつ，論者は，近代に於て「言葉」が疎外の「共－動力」となっていることを洞察し，言葉が言葉として疎外と結びつくことを問題として深く追究する。言葉そのものに外化の働きがあるからである。言語が語り出されることによって人間の「間」が「間」として現勢的に開かれそこで言葉が通すると同時に，その流通の場に於て言葉が変質変換するという事態を掘り下げて問題にして行く。流而もすべての「有るもの」は，言葉に言われることによって「有るもの」としてあらわになる故に，すべての「有るもの」が外化・疎外の運動の中に有ることになる。疎外の問題を根本的に探ろうとする論者の所謂「有論的」見地が開き出され，「言葉と疎外」のこの究明は本論文でも特に密度の濃いものであるのみならず，従来あまり問題とされることのなかった観点，而も最も深く問題を見得る観点の一つを導入したものと言えよう。

「外化——取りもどし」という機軸によって，論者は更に，一方，自然的占有権を一般意志の下に「放棄し断念し譲渡する」ことによってその代りに法的所有権を獲得するという近代の「社会契約」的思想と，他方，キェルケゴールの宗教的取りもどし，即ち人間が実存として神との関係から真に自己を「受け取り直すこと」との間にも，近代的世界に於ける人間の有り方を貫いた一つの隠された連関があることを洞察し，又カント哲学の根本構造のうちにも超越論的な断念・放棄と取りもどしの連関があることを洞察する。このようにして論者は，様々な局面に，相互に，対立するような様々な局面にも，近世的世界の根本的動向として同じ一つの外化・疎外の運動を見出すことによって，疎外がそもそも近代世界の構築において必然のものであったことを示しつつ，疎外の問題を規模の大きな地平のうちに立てている。このような着想及び問題の展開に論者のユニークな研究がよくあらわれている。

以上のように「疎外」という事柄そのものを問題として追究した有意義な労作ではあるが，やはり幾つかの問題点が指摘されざるを得ないであろう。外化・疎外の諸相が区別されそれぞれの相の綿密な分析が

なされている反面，それらの間の動的連関そのものについては主題的に究明の光があてられていない。どのようにして外化と取りもどしの間にずれが生ずるに至るのか。どのようにして更に変動して取りもどし不可能になるのか。「外化——取りもどし」の場がどのように変質して行くが故に外化が疎外になるのか。この変動そのものの立入った解明が必要であろう。

疎外という問題の連関には，その克服という問題が含まれざるを得ないであろう。論者はこの問題を表明的にとりあげることをしていない。疎外をどう見るかが克服の可能性を採る基礎になるとしても，克服の可能性を問題とすることなしには問題そのものに対して不充分といわざるを得ないであろう。このことは更に次の点につながって行く。

論者が問題究明の根本的な手がかりとしたヘーゲル「精神現象学」に於ける「自己疎外的精神」の章は，ヘーゲル自身のコンテキストに於ては次章の「自己確信的精神，道徳性」以後で示される精神の運動によって止揚されて行くのであるが，論者は，この精神の全運動を必ずしもふまえることなしに専ら「自己疎外的精神」の章に集中的に依拠している。論者の趣旨はヘーゲル解釈そのものにあるのではないとは言え，このような扱い方が，自己の問題意識からの強い投光による或る種の偏りを論者のヘーゲル理解に与えているように思われる。この事は，カント理解についても言えるであろう。

論者の問題設定は，マルクスの「疎外」概念の以前に遡って問題を見直すことであり，又その故に新しい光を疎外という事態にあてる事が出来たのであるが，そのような問題の連関の中にマルクスの「疎外」概念をあらためて具体的に位置づけることが，問題の性格からして求められるであろう。

これらの問題点については今後の立入った解明追究補完が期待されるところであるが，そのための地盤は本論文に於て充分用意されていると思われる。

以上審査したところにより本論文は文学博士の学位論文として価値あるものと認められる。